新学習指導要領の実施に向けた準備が本格化する中、学校現場は様々な課題に直面することが予測される。本コーナーでは、実践事例や有識者インタビューなどを通じて、現場の疑問や課題を解決し、自校の実践につなげる情報を提供する。

テーマ

新課程入試につながる進路指導とは

――生徒一人ひとりが学びや経験を意味づけ、進路・キャリアにつなぐ――

はじめに

新課程入試につなぐ進路指導とは

新学習指導要領は、予測困難な社会を生きるために必要な資質・能力の育成を目的とし、「何ができるようになるか」を重視した学力観をより明確化した。その一環として、探究系の教科・科目が創設される。生徒が自らの興味・関心を軸に課題を発見し、解決を目指す中で身につけた資質・能力を教師が多面的に把握し、生徒の次の学びにつなげる形成的評価が重要になる。大学入試でも、学部の学びへの接続を意識した選抜を行う傾向が強まると予想される。

文部科学省からの新学習指導要領に対応した入試（新課程入試）についての詳細な発表は、2021年の夏頃になる予定で、現状では不明な点も多いが、育成を目指す資質・能力に基づくカリキュラムを編成するためには、今から新課程入試に向けた進路指導のあり方を考える必要がある。

今回は、探究活動を通じて生徒一人ひとりの進路実現を目指す、秋田県立秋田南高校の実践を紹介する。

実践事例

「大学の学びへの接続」を目指した探究活動と進路指導

秋田県立秋田南高校

秋田県立秋田南高校は、2015年度にスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、育成を目指す資質・能力として「5つの能力、3つの資質」（P.66・67図2）を設定し、探究活動を通じた育成をスタートした。5年間で深化した探究活動では、生徒の中に、課題を見つけ、主体的に取り組む態度が醸成されている。自ら探究に臨む姿勢が、生徒の進路選択と教師の進路指導をどう変えてきたのか、話を聞いた。

Q1 探究活動は、生徒の進路選択にどのような影響を与えたか？

A1 「対話」を重視した校内外の活動を通じて主体性が養われ、生徒が率先して進路選択を行うように

中村先生　2014年度に私が赴任した当時の秋田南高校は、県内有数の進学実績を着実に積み重ねてはいたものの、特徴的な教育や盛り上がる行事などが見あたらない、「普通の進学校」でした。当時は中高一貫教育校化に向け、中等部の設置準備を行っている最中でした。そこで、本校の基本理念「グローバルリーダーの育成」を明確化し、SGHへの申請も行いました。育成を目指す資質・能力として、「5つの能力、3つの資質」を設定し、主に探究活動によってそれらの資質・能力を育成する構想を打ち立てたのです（P.66・67図2）。

進路指導主事
渡部恵子
わたなべ・けいこ
教職歴35年。同校に赴任して3年目。国語科。

進路指導部・学術探究コース主担当
中村 東
なかむら・あずま
教職歴22年。同校に赴任して7年目。数学科。

探究活動部主任
關 友明
せき・ともあき
教職歴15年。同校に赴任して7年目。地歴公民科。

進路指導部
佐藤啓介
さとう・けいすけ
教職歴14年。同校に赴任して8年目。理科。

秋田県立秋田南高校

◎校訓は「獨立自尊」。「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を基本理念に掲げ、「基本的知識・技能・習慣」「探究力」「協働力」の育成を重視した教育活動を展開する。
◎設立　1962（昭和37）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東北大、秋田大、千葉大、一橋大、国際教養大などに137人が合格。私立大は、慶應義塾大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ185人が合格。
◎URL　https://akitamihami-h.wixsite.com/akitaminami

關先生　探究活動は、SGH期間中と期間終了後の現在では、探究テーマやカリキュラムに若干の違いはありますが、資質・能力の育成において重視するポイントは共通しています。具体的には、対話する機会を意図的に多く設定すること、憧れられる先輩を育てること、そして地域連携の推進です。（図1）

中村先生　探究活動を通じて、協働作業やプレゼンテーションが得意な生徒が増えるなど、育成を目指していた資質・能力が想像以上に伸びました。そして、通常の授業では見過ごしていたであろう生徒の長所に、私たち教師が気づくようになりました。また、生徒に「南高の探究活動」の歴史をつくっていこうとする意識が芽生え、「後輩のために何かできないか」と訪れる卒業生が増えています。卒業生との連絡が密になれば、教師も生徒も、進学後の学びについて知る機会が増えます。志望大学との接続をよりスムーズにする進路指導につながっています。

佐藤先生　探究活動の実施前・後の学年では、進路に対する生徒の意識が全く違います。探究活動を経験すると、課題を見つけ、それに主体的に取り組む態度が醸成されます。生徒は進路の検討時も、そうした態度を自然と表出するようになりました。自分は何に興味・関心があり、社会の中でどんな役割を担いたいのか。それを実現するために大学でどんなことを学ぶのか。自主的な進路「探究」が始まったのです。

渡部先生　2年前に赴任してきて、本校の生徒を見て最初に感じたのは、話し合いができる、自分の意見がよく言えるということ。探究活動の中でディスカッションをしたり、自身の考えを発信したりするうちに、思考力や主体性が鍛えられ、回り回って進路選択に役立っているように思えます。

図1　秋田南高校における資質・能力の育成を目的とした探究活動のポイント

❶ 対話する機会を多く設定する

生徒同士が対話する場面をつくることで、他者の意見に耳を傾ける「聴く力」を養う。お互いの発言を受け止められる関係が活発な議論を生み、生徒が主体的に探究活動に向かうようになる。生徒と教師との対話の場面も多く取り入れており、教師は教えすぎず、できる限り生徒に語らせながら、「何が原因なのだろう？」「そのメリットは何だろう？」などと問いかける。そうした対話を続けることで、生徒は根拠を持って、論理的な主張をするようになる。

❷ 憧れられる先輩を育てる

探究活動で自分がどのように成長していくのかを、同じ高校の先輩の姿を通して具体的にイメージさせることで、生徒一人ひとりの活動のゴールを明確化する。平素から、課外活動や外部大会の実績を、動画や写真で校内外に発信しているが、探究活動においてもそれは同様だ。公共ホールのステージに立ち、英語で堂々とスピーチする先輩の姿を見ることで、後輩の生徒は、探究活動を通して「何ができるようになるか」を理解し、「自分はどのようになりたいか」を考える。異学年交流の場面も多く設けられているため、先輩に対する憧れが学びのモチベーションにつながるとともに、身につけるべき力を実感することができる。

❸ 地域連携を推進する

探究活動の中で、地域の社会人との対話など、学校外の活動を重視する。大学の学びの先の仕事や社会人としてのキャリア形成など、自分のあり方・生き方を考えるようになる。

1年次では2月末に、2年次では10月末に成果発表会を開催し、下級生や保護者、大学教員や連携機関の人などに対して、研究成果を発表する。

Q2 探究活動によって深化した進路指導は、新課程で重視される「大学の学びへの接続」にどうつながるのか？

A2 2年次の終わりに行う「進路検討会」。教科学力だけではない生徒の多面性から、可能性を見つける

佐藤先生　探究活動を始めてから、進路面談ではより発展的な指導ができるようになりました。生徒の自主的な検討によって、「何となく工学部」ではなく、「こういうことを学びたいから工学部に行きたい」などと、面談の段階で志望内容がある程度固まっています。そのため、「その分野に強いのは○○大学だから、そこの研究室を調べてみては」といった具体的な指導ができるようになりました。生徒は1年次から進路について考え始めるので、指導の時期も早期化できます。以前は3年次に行っていた第1志望大学の絞り込みを、現在は2年次の夏季休業から後期にかけて行っています。

中村先生　本校では2年次の12月、2月の模擬試験の成績を返却するタイミングで、どの生徒を、どの大学のどの入試に向かわせるのかを検討する「進路検討会」を行っています。以前は主に教科学力を基に検討していましたが、現在は、例えば発信が得意な生徒は東北大学のAO入試、自分なりの意見を持つ生徒は国際教養大学のグローバル・セミナー入試などと、生徒の資質・能力と各大学が求める人物像を考慮した検討を行っています。探究活動には学年の全教師がかかわっているため、各教師がそれぞれの視点から生徒の印象を述べ合うことによって、生徒一人ひとりの多様な側面が浮かび上がり、検討の精度を高めることができています。また、中高一貫教育校化に伴い、中学生の給食のために、昼休みの時間が55分間に延長されたのですが、そのうち15分間の「昼自学」の時間を利用した面談が日常化して

総合探究コース
- 文理５クラスが対象。
- 将来学びたい学問分野がテーマの個人研究。
- 共通の学問分野を学ぶ生徒が一緒に活動し、協働で探究を深める。
- 研究レポートの作成。

に効果　高3

第1志望大学の絞り込み
活動例）第1志望宣言

12月／2月	4月	1月
進路検討会	進路検討会	出願検討会

2年次以降は、研究室1～2室に絞って訪問。志望理由をある程度固めて、具体的な質問ができる状態にする。

生徒一人ひとりが学びや経験を意味づけ、進路・キャリアにつなぐ

5つの能力

実践力	研究成果の発信と提言 社会への還元・実践
プレゼンテーション能力	考えや思いを伝える力 英語での発表と交流
論理的思考力	情報の分析と仮説の検証 根拠を明確にして考察する
課題探究能力	情報の選択と収集 コミュニケーションと協働
課題設定能力	課題意識をもつ グローバルな視点の獲得

3つの資質

基本的知識・技能・習慣	探究力	協働力
探究・協働に必要な（かつその過程で養われる）力	主体的に課題を発見・探究・解決する力	対話を通して良好な人間関係を構築し、仲間とともに探究・創造する力

います。Classi（＊1）の学習時間でのコメントで、生徒の訴えにすぐに対応して面談できる体制にもなっており、生徒の把握を大事にしています。

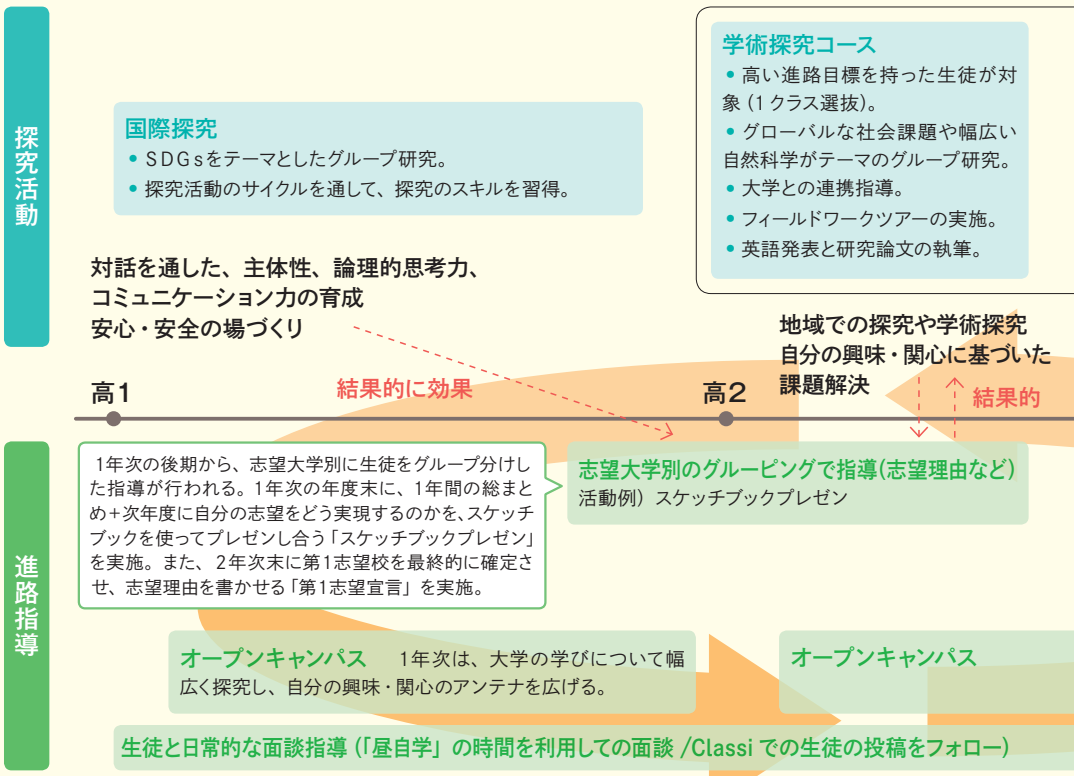
渡部先生　資質・能力重視の大学入学者選抜が増えてきた現在は、探究活動での経験が入試に直接役立つ例も少なくありません。例えば、数日にわたる講義を受け、レポート、面接などで合否を決める国際教養大学のグローバル・セミナー入試に、探究活動を通じて考察力や発信力に自信を持った生徒が積極的に挑戦し、20年度入試では合格者22人のうち、本校の生徒が6人を占めました。

關先生　これまで本校が積み上げてきた、育成を目指す資質・能力の明確化、社会に開かれたカリキュラム、各教科・科目での資質・能力の育成、生徒一人ひとりを多面的に評価する取り組みは、今後の新課程入試につながるものであり、多様な選抜方法にも対応できる力を育むものと感じています。

中村先生　新課程入試は、これまで以上に、高校での学びを、大学入学後の学びへとつなぐことが重視されると理解しています。探究活動などで、「唯一の正解」がない問いを自ら立て、納得解や最適解を導く経験を通じて、資質・能力を育むことで、高校の学びを大学の学びへと接続していきます。その結果、明確な志望理由を見つけ、入学後の学びのイメージを描くことができれば、新課程入試に対応できる力がおのずと身につくのだと思います。入試ごとに求められる能力が多様化することを考えると、準備時間を長く取れる点で、志望大学決定時期の早期化も、より大きな意味を持つでしょう。

＊1　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図2　資質・能力の育成に特化した探究活動での学びや経験が進路につながる



＊学校資料を基に編集部で作成。

より詳しい内容は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

動画解説　事例・解説

新課程入試につながる進路指導を考える
- 秋田県立秋田南高校の指導事例
- 先行して変化する高校入試問題
- 総合型・学校推薦型選抜の多様な選抜例からの考察

新課程のカリキュラム等の検討状況調査結果・提案

有識者による新課程の動画解説も満載

―疑問や課題を解決！実践につながる！―
新課程レポート
ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ＞入試改革／新課程 からアクセス